

園庭における 1 歳児の身体活動を促す保育実践

氏 名 : 直井 夕岐子

目次

| | |
|--|----------|
| 序論..... | 2 |
| 第 1 章 第二流山おおたかの森園の現状と課題..... | 4 |
| 第 1 節 現状の把握と目的の設定 | 4 |
| 第 2 節 課題の改善方法 | 5 |
| 第 2 章 1 歳児の身体活動を促すための保育実践 | 7 |
| 第 1 節 カンファレンスによる改善策の検討 | 7 |
| 第 2 節 結果と考察 | 9 |

序論

近年、社会の変化に伴って子どもたちの運動の機会は減っている。乳幼児期の子どもを取り巻く現状を見ると、都心部を中心とした住宅事情や、安全に遊ぶことができる公園や空き地の減少、不審者や交通事故に対する不安など、十分なスペースにおいて安心して運動ができる条件が揃うことは難しくなっている。

2019年4月、WHOは「Guidelines On Physical Activity, Sedentary Behavior and Sleep For Children Under 5 Years Of Age（5歳未満の子供のための身体活動、座りがちな行動および睡眠に関するガイドライン）」⁶を公表しているが、その中で子どもの心身の健康と幸福を向上させ、肥満を防止するためには幼児期の質の高い睡眠と、活発な身体運動、そして座りがちな時間の短縮が不可欠であることを示した。特に0.1.2歳児では継続して1時間以上同じところに固定しないことを提唱しており、「どれだけ動かない時間を減らすか」という視点で子どもの発達をみるのが重要だといえる。

「保育所保育指針」²をみると、【1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容】では、【走る、跳ぶ、登る、押す、引っ張るなど全身を使う遊びを楽しむ】と、具体的な【動き】に関する記載があり、さらに【心と体の健康は、相互に密着な関連があるものであることを踏まえ、子どもの気持ちに配慮した温かい触れ合いの中で、心と体の発達を促すこと。特に一人一人の発達に応じて、体を動かす機会を十分に確保し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。】、また【事故防止に努めながら活動しやすい環境を整え、全身を使う遊びを取り入れること。】と、身体活動を意図的・計画的に行うことの重要性を読みとることができる。

あい・あい保育園第二流山おおたかの森園には、子どもたちが走り回れる広さの園庭があり、さらに全天候型遊具 AINIBOX が設置されている。この特色を最大限に生かし、日常の園庭遊びの中で子どもたちの十分な身体活動の実践を目指したいと考えた。

また、流山市は、「母になるなら流山市」というコンセプトのもと、子育てしやすい街を目指し、現在も人口が増え続けている。2021年4月現在、流山市には認可保育施設（小規模保育施設を含む）が91施設あり、その中で園庭を有する施設は62か所である。流山市の保育課担当者によると、「園庭のある保育園に入園したい」という保護者の要望は多く、地域のニーズに適応した保育園として園庭遊びの質の向上に努めたいと考える。

第1章 第二流山おおたかの森園の現状と課題

第1節 現状の把握と目的の設定

第二流山おおたかの森園は 2021 年 4 月に開園し、園庭環境や AINIBOX の安全な遊び方について職員間で話し合いをした後、本格的に園庭遊びがスタートした。5 月中旬には砂場の玩具（型抜きやままごと）を増やし、0 歳児 4 名、1 歳児 11 名、2 歳児 11 名、3 歳児 11 名、4 歳児 5 名、合計 41 名の在籍で運営している。

吉岡・戸井田・佐藤・小木曾・中澤⁷によれば、保育園の一日は、午前中に遊び（活動）が集中しており、また午前中の活動が、行事などの日より、戸外遊びの日の方が運動量は多い。

運動量が多いとされる午前中の園庭遊びでは、いったいどのような遊びが展開されているのか、年齢ごとに明らかにするために、保育士 9 名に、具体的な遊び方について自由記述をするアンケートを実施した。その結果、年齢によって【遊びの項目数】に差があることが明らかとなった（表 1）。

表 1 保育士アンケート結果

| 年齢 | 項目数 | 具体的な遊び方 |
|-----------------|-----|---|
| 0 歳児クラス | 5 | 砂遊び・ブランコ・ボール・シャボン玉・触れ合いながら歩行する |
| 1 歳児クラス | 4 | 砂遊び・ブランコ・ボール・シャボン玉 |
| 2 歳児クラス | 11 | 砂遊び・ブランコ・ボール・シャボン玉・かけっこ・追いかけてっこ・三輪車・自然探索・散歩ごっこ・電車ごっこ・滑り台 |
| 3.4 歳児 合同クラス | 16 | 砂遊び・ブランコ・ボール・シャボン玉・かけっこ・三輪車・畑を耕す・だるまさんが転んだ・追いかけてっこ・けんけんぱ・宝探し・しっぽ取り・縄跳び・だるまさんが転んだ・氷鬼・滑り台 |

特に、保育所保育指針でも【走る、跳ぶ、登る、押す、引っ張るなど全身を使う遊びを楽しむ】と方向付けられている年齢にも関わらず、1 歳児の遊びの項目数が少ないことが浮き彫りになった。1 歳児の遊びとして挙げられたものを見ると、「具体的な遊び方」を質問しているにもかかわらず、砂遊び、ブランコ・ボール・シャボン玉という“遊具・物・場所の名称”にとどまっている。このことから、1 歳児の遊びの項目数が少ないことの理由として、子どもの遊びを遊具や物に頼ってしまい、保育士とのやり取りや触れ合いを“1 歳児の遊び”と捉えることができていない、保育士が遊びの種類を知らず、1 歳児と何

をして遊べば良いかわからない等が考えられる。

また、遊びの項目数が少ないということは、「身体を動かすことを体験するために必要な環境を用意し、いろいろな遊びを一緒に楽しむ」ということが実践されていないということではないだろうか。幼児期運動指針⁴をみると、3歳以上児の運動についての提言であるため、1歳児についての具体的な記述は見当たらない。発達段階を考えてみても、大きな固定遊具を使いこなすことやルールを共有する遊びが困難な1歳児は、園庭遊びでの活動を工夫する必要があるのではないだろうか。3歳未満の時期は生涯にわたる健康生活の基礎づくりの時期でもある。日常の園庭遊びで子どもたちの十分な身体活動を実践する保育のために、まずは理想と現実とのギャップが大きい1歳児の園庭遊びを改善することが急務だと考えた。以上により本研究では、1歳児の園庭遊びにおける問題点を把握し、身体活動を促す保育実践を検討することを目的とする。

第2節 課題の改善方法

1歳児の遊びの項目数が少ないことは、身体活動量にどのような影響を及ぼすのだろうか。長谷川・定行¹によれば、1歳児が行動範囲を広げ、遊びを通して多様な動作を身に着け、基本的な運動機能を発達させていくことから、この時期の子どもにとって“歩行”は重要な意味を持つ。また、散歩など、公園などへの移動の歩行は主に運動量を増やし、歩行の洗練に寄与するものと位置づけられるが、園庭等での自由遊びに使う歩行は、運動量を増やすほか、遊びを通して走る動作をはじめとした新しい動作の獲得につながるものと位置づけられ、それぞれの歩行の質は異なる。そのため、園庭における遊び方によって、走る、跳ぶ、登る、押す、引っ張るなど全身を使う遊びの経験や新しい動作の獲得、また総合的な運動量に影響を及ぼす可能性があると考えた。

長谷川・定行によれば“歩数”は身体活動量の一つの指標になるため、身体活動量を計測する方法として歩数計測を考えた。1歳児(11名)に歩数計を装着し、6月の2日間、園庭遊び中の歩数を計測した(表2)。歩数計測および歩数計の装着にあたっては、1歳児クラスの保護者に、身体活動の測定のために装着すること、及び装着に違和感がある様子が見られた際にはすぐに外すこと、さらに倫理的配慮として、計測した歩数データは個人が特定されることがない状態で、社内研修のレポートに使用することを説明し、口頭によって同意を得た。計測時間は、10時頃から始まる園庭遊び開始後の30分間とした。また、どのような遊び方をしているのかということを確認するために、ビデオ撮影を行った。

表2 歩数計計測結果

| 園児名 | 月齢 | 歩数 | | 備考 |
|-----|--------|------------|------------|---------------|
| | | 2021/06/08 | 2021/06/21 | |
| A | 1歳6か月 | 3044 | 1868 | |
| B | 1歳4か月 | 2011 | 1212 | |
| C | 1歳9か月 | 1284 | 346 | 6/21 機嫌が悪く抱っこ |
| D | 1歳6か月 | 936 | 1269 | |
| E | 1歳6か月 | 143 | 310 | |
| F | 1歳10か月 | 1232 | 欠席 | |
| G | 1歳11か月 | 534 | 1155 | |
| H | 1歳5か月 | 1071 | 1005 | |
| I | 1歳5か月 | 欠席 | 897 | |
| J | 2歳0か月 | NG | 1492 | 6/8 歩数計に違和感 |
| K | 1歳11か月 | NG | 1787 | 6/8 歩数計に違和感 |
| 合計 | | 10255 | 11341 | |
| 平均 | | 1281 | 1134 | |

歩数計計測結果から、園児 A と園児 E の計測結果に着目した。1歳6か月という同じ月齢にも関わらず、歩数の差が大きいこと（園児 A：3,044 歩・1,868 歩、園児 E：143 歩・310 歩）と、園児 E の歩数が他児と比較して圧倒的に少ないことである（平均値：1,281 歩中、143 歩、平均値：1,134 歩中、310 歩）。園庭環境があっても、十分な身体活動ができない子どもがいることが課題であると考えた。

また、園庭遊びの中で子どもたちの十分な身体活動の実践を目指すうえでは、歩数だけでなく遊びの質の面から考えることも重要である。齊藤・増田⁵によれば、1歳児における遊びには「物」、「空間」、「人（保育士・仲間）」が遊びのきっかけにおいて重要な要因になっており、物への興味が遊びへと結びつくためには物の使い方を保育者が提示することが必要であり、その結果、新たな遊びへとつながっていく。そのため、園庭で遊ぶ環境の質を高めるためには、保育士が「物」、「空間」、「人（保育士・仲間）」の環境をいかに意識して保育できるかどうかということが、身体活動を促す質の良い保育に結びつくといえよう。

そこで動画カンファレンスを行い、十分な身体活動を行うための園庭遊びにおける課題について保育士 9 名で話し合いをした。動画カンファレンスは、ほぼ毎月実践しており、職員全員が同じテーマに沿って、計画（P）・実践（D）・評価（C）・改善（A）一連の流れを検討できるものである。そのため、1歳児クラス担任当事者だけの問題とせず、園全体の問題として捉えるために有効であると考えた。

保育所保育指針解説³によれば、保育所における保育は環境を通して行うこ

とを基本としており、物的環境だけでなく人的環境を含む人、物、場が相互に関連し合って作り出されていく。また、前出の齊藤・増田は、1歳児の遊びには、物、空間、人（保育士・仲間）が遊びのきっかけにおいて重要な要因になると述べている。そのため、園庭における1歳児の身体活動を促す保育実践を検討する際には、現在の環境である物、空間、人を見つめ、問題点を明らかにする必要があると考えた。カンファレンスで挙げられた課題を、「【物】の問題」、「【空間】の問題」、「【人】の問題」の3つに分けて整理し、考察を深めた。

初めに、「【物】の問題」である。砂場にはバケツ、シャベル、型抜き、ままごと等の玩具があるが、広いスペースには子どもが触ってみたいくなる玩具が十分用意されていないこと、遊ぶ玩具の選択肢が少ないこと（ボール、三輪車のみ）がわかった。次に「【空間】の問題」である。動画カンファレンスを通して、子どもは保育士のそばで遊ぶ傾向があることがわかった。つまり、保育士の居場所は子どもがいる場所になっていくため、保育士の居場所の偏りは、子どもの遊びのスペースの偏りにつながる。1歳児の遊びの質には「空間」が重要な要素の一つであるため、保育士の居場所に留意し、より効果的にスペースの利用ができる園庭空間に変えていくことが必要である。最後に「【人】の問題」である。保育士が、立ったまま見守りをしている場面が多い、園庭全体を見渡している保育士が複数いるが、子どもと個別にやり取りをする姿があまり見られないということがわかった。また、シャボン玉やボールを使用して遊んではいるが、保育士は物の使い方を提示しておらず、シャボン玉を作るだけ、ボールを転がすだけであり、子どもの身体活動につながる援助を積極的に行っていないことが明らかとなった。

以上のように、「【物】の問題」、「【空間】の問題」、「【人】の問題」について整理し、考察することで、それぞれの観点からの問題点と改善の方向性が明らかになった。さらに、カンファレンスでは「E君は、昨日もずっと砂場で遊んでいて、広いスペースでは遊んでいなかった。今日もずっと砂場にいますね。」というような昨日から今日、今日から明日への保育のつながりや、一人一人の子どもの特性をとらえた指摘が見られた。

このような点も踏まえ、第2章では具体的な改善策を検討し、その改善策に基づいて行われた保育実践について、(1) 動画カンファレンス、(2) 歩数計測の結果を比較し、考察する。

第2章 1歳児の身体活動を促すための保育実践

第1節 現状の把握と目的の設定

園庭遊びの中で子どもたちの十分な身体活動の実践をするための動画カンフ

ァレンスの実施により明らかになった「【物】の問題」、「【空間】の問題」、「【人】の問題」の問題点について、それぞれ改善策を検討した。「物」、「空間」については、子どもたちが視覚的にも興味を示す玩具や空間を用意し、主体的に歩く、走る、くぐる、ジャンプするなどの身体活動を促す「園庭環境の工夫」が必要であることが分かった。また、「人」については、保育士が遊びのモデルとなって物の使い方や遊び方を提示し、遊びを通して子どもとのやり取りを増やす等の「保育技術の向上」が求められる。さらに先に挙げた「園庭環境の工夫」と「保育技術の向上」は、身体活動を好み、興味を示す子どもだけに提供されるものであってはならない。在籍するすべての1歳児の身体活動量に影響を与えるためには、一人一人の子どもの特性をとらえ、計画的に身体活動を促す遊びに誘い、保育士による「園庭活動の工夫」と「保育技術の向上」の成果を子どもたちが経験できるように「計画性を持った個別対応」も不可欠であると考えた。

そのため、1歳児の園庭遊びにおける問題点を把握し、身体活動を促す保育実践のための改善策は「園庭環境の工夫」「保育技術の向上」「計画性を持った個別対応」の3つの項目に分けて整理し、実践した。

【園庭環境の工夫】

何もない広い園庭スペースは、3歳以上児にとっては自由な発想で遊ぶことができ、思い切り走り回ることができるが、1歳児にとってはコーナー設定をした方が、興味を持つことができるのではないかと考えた。具体的には、「ランニングコースの設置（コーンや柵にイラストを取り付ける。目標があることで子どもが主体的に走りたくなる。）」、「風船ぶら下がりコーナー（視覚的な興味を持ち、背伸びをして触ろうとする身体活動につながるのではないかと考えた。シャボン玉は保育士の配置が必須だが、風船をつるして風に揺れているコーナーならば、保育士は見守りでも対応可能である。）」、「保育士の配置箇所を決めて、遊びスペースが偏らないように留意する。（子どもは保育士のそばで遊ぶ傾向があるため、保育士の居場所は大きな影響を与えるのではないかと考えた。）」これらの実践により、広いスペースが空くことなく、園庭環境の「空間」を活かした遊びにつながると考える。また、フラフープ、園庭用足こぎ乗用玩具などの、玩具の購入を進め、子どもにとって魅力的な「物」を整える。

【保育技術の向上】

子どもの身体活動につながる援助をするためには、保育士自身が1歳児と関わる際の遊びの種類を増やすことが重要ではないだろうか。保育士が「まてまて！」と、子どもを追いかけるなど、何気なく行う“やりとり遊び”を、【身

体活動を促す遊び】と意識することから着手した。カンファレンスを通して、複数の遊びのアイデアが出された。「しっぽ取り（保育士のエプロンについているひもを掴もうとする遊び）」「まてまてあそび（簡単な追いかけ遊び）」「風船にひもをつけて引っ張る遊び（引っ張る）」「保育士との相撲ごっこ（押す）」「保育士の場所までよーいどん（走る）」「保育士の股をくぐる（くぐる）」「高い場所にある風船を触る（跳ぶ）」「シャボン玉を追いかける」「ボールを隠して宝探しをする」「ひらひら暖簾くぐり（スズランテープを使った遊び）」「引っ越しゲーム（指定場所まで移動する遊び）」「電車ごっこ」「へびさんまてまて。（縄跳び遊び）」など、固定遊具を使用せずに保育士の技術によって遊びを提示することにより、遊びが増えるのではないだろうか。カンファレンスを通して、保育士経験が少なく遊び方を知らない保育士も具体的な遊び方を知ることができ、「遊びのイメージができた。早く子どもと一緒に遊びたい。」という感想も出たため、この実践により、保育士の保育技術が向上され遊びを通して無理なく身体活動を促すことができると考えた。

【計画性を持った個別対応】

一人一人の発育に応じて、体を動かす機会を十分に確保し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにするためには、保育の計画と振り返りが必須である。「こんな遊びに誘い、こういう身体活動を経験できるように援助する」という計画と、「今、誰がどこで何をして遊んでいるのか」という実践が結びつく保育をするためには、計画の時点で【園庭遊び】という大きなカテゴリーではなく、身体活動を促す遊び、感触遊び、探索活動など遊びのねらいを見極めることが重要であると考えた。バランスの良い遊び方ができるよう、日誌には、具体的に提示した遊びと、個々が遊んだ内容を記入していくことを実践して振り返りの場を持ち、子どもによって遊ぶ経験に偏りがないう園庭遊びを計画的に楽しむ工夫をしていく。

第2節 結果と考察

今回は、1歳児の園庭遊びにおける問題点を把握し、身体活動を促す保育実践の検討を行い、改善策を実践した。行った保育実践について、（1）動画カンファレンス、（2）歩数計測の結果を比較し、考察する。

【（1）動画カンファレンス】

（ア）園児 E の変化

—興味を示したイラストまで歩く—

6月には、園庭に出るとすぐに砂場へ向かっていた園児 E が、7月には園庭

の柵とコーンに取り付けられた 6 か所のイラストに興味を示し「あー！」と、指差しをしながら、イラストからイラストへと園庭内を自ら歩く様子が見られた。子どもが興味を持つイラストを柵に取り付けたり、頭上に風船をぶら下げたりするなど、園庭に視覚的な楽しさを取り入れたことで、目標とする「物」と関わろうとする意欲が生まれたのだと考える。

－模倣と遊びの発展－

フラフープで電車ごっこをする保育士と子どもをじっと見ていた園児 E が、自分でも別のフラフープを持ち、電車ごっこの模倣をしながら後ろからついて歩く姿が見られた。保育士や友達の遊びをモデルとして模倣し、自らも楽しむきっかけになったといえる。

(イ)子どもたちの変化

－フラフープを使用した遊びの広がり－

フラフープに興味を示す子どもが多く、大人気の玩具となった。保育士が提示したフラフープの遊び方は、「電車ごっこ」、「保育士が転がしたフラフープを追いかける」、「トンネルのようにフラフープをくぐる」、「地面に置いたフラフープをジャンプする」の 4 つであったが、一人の子どもがフラフープを両手で持ち地面に押し付けて歩いて進む遊びをし始めた。さらにその様子を見た別の子どもも模倣し同じ遊びをし始め、続々と遊びが広がっていく様子が見られた。保育士による「物を使った遊びの提示」は、夢中で遊んでいるうちに子ども自身が新しい遊び方を発見する力を引き出すことにもつながったのだと考える。

－見つけた「物」を遊びに発展させる力－

子どもたちが手を伸ばし触って遊ぶことを想定し、頭上にひもを張り風船をぶら下げた。風船を触ろうと背伸びをしたり、ジャンプをしたりしていた子どもたちだったが、たまたま落ちていた 1 つの風船を一人の子どもがサッカーのように蹴って遊び始めたことをきっかけに、他の子どもも同じような遊びに発展していき、保育士がサッカー用の風船を増やして対応する場面もあった。子どもが「物」との関わりのなかで自ら遊びを発展させる様子が見られた。

(ウ)保育士の変化

－子どもの特性を踏まえた保育実践－

砂場遊びを一定時間楽しんだ子どもに対し、保育士がタイミングを見極めながら「向こうに風船もあるよ。行ってみようか。」「先生と一緒に、よーいどん！をしようよ。」などと、身体活動を促す遊びに誘う場面が増えた。これは「今、〇〇ちゃんは、何をして遊んでいるのか。」という一人一人の子どもの

特性を踏まえた保育実践への意識が芽生えた結果であろう。座りっぱなしの活動にならないように、無理なく身体活動の実践ができる遊びに誘い、一人一人がバランスの良い遊びを経験できる保育へと変化したといえる。

－保育士の“言葉”の増加－

さらに、6月と比べると保育士の「言葉」が多く聞こえるようになった。具体的には「〇〇ちゃん、すごいね。(褒め、認める)」「もう一回やってみよう。(意欲を引き出す)」「しゅっしゅっぽっぽ。(一緒に遊ぶ)」「先生のことを見て！(遊びを提示する)」「こっちだよ。もう少し！(歩くこと、走ることを促す)」などである。これはやり取り遊びが増え、ねらいを持った保育の実践ができてきた結果ではないだろうか。

【(2) 歩数計測 (図3) (図4) (図5) (表6) (表7)】

歩数計測において、もっとも歩数が増加したのは園児 E である。6月は143歩、310歩であったが7月には、923歩、1,295歩、1,031歩、8月は1255歩であった(図3)。

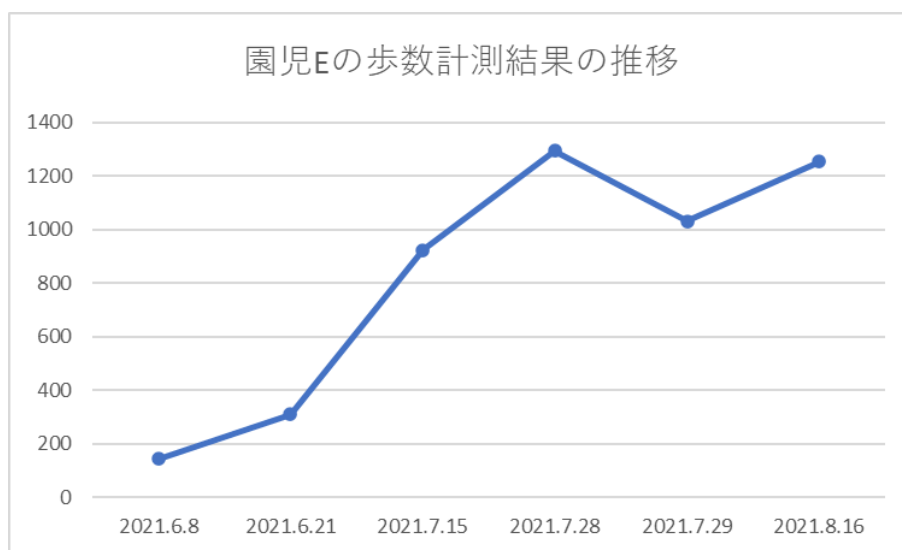


図3 園児 E の歩数計測結果の推移

園児 E と平均歩数の差を比較すると、6月は、-1,138歩、-824歩だったが、7月は、-845歩、-36歩、-294歩となり、8月には-80歩であった(図4)。砂場遊びを好み、主に座った活動をしていた園児 E が興味を持つことができる園庭環境に変え、無理なく身体活動を促す遊びの実践をしたことで、歩数が増えたのではないだろうか。

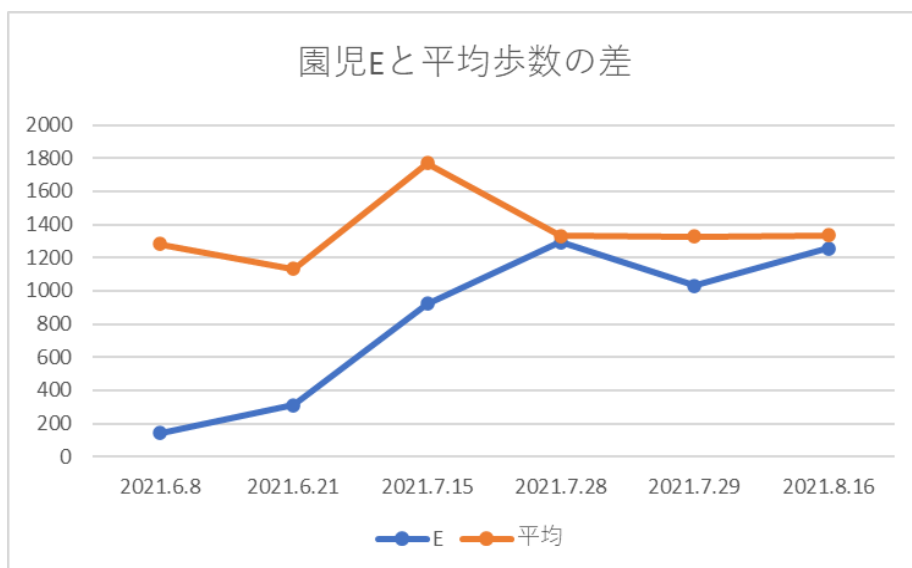


図4 園児 E と平均歩数の差

次に、「上位2名合計歩数」と「下位2名合計歩数」の差であるが、6月合計歩数差は4,378歩、2,999歩であったが、7月の合計歩数差は1,970歩、1,307歩、1,636歩と差が少なくなった。さらに8月には、1,256歩と、多少の増減はあるものの全体的にみると差は徐々に少なくなっていった。「上位2名合計歩数」を見ると、6月から順に5,055歩、3,655歩、4,463歩、3,430歩、3,623歩、3,369歩であり、保育を改善する前後で大きな変化は見られないが、「下位2名合計歩数」は6月から順に677歩、656歩、2,493歩、2,123歩、1,987歩、2,113歩であり、保育を改善したことで大きく歩数が増えたことがわかる（図5）。この結果から、特に動く遊びを好まない子どもの身体活動量が増えたことがわかる。

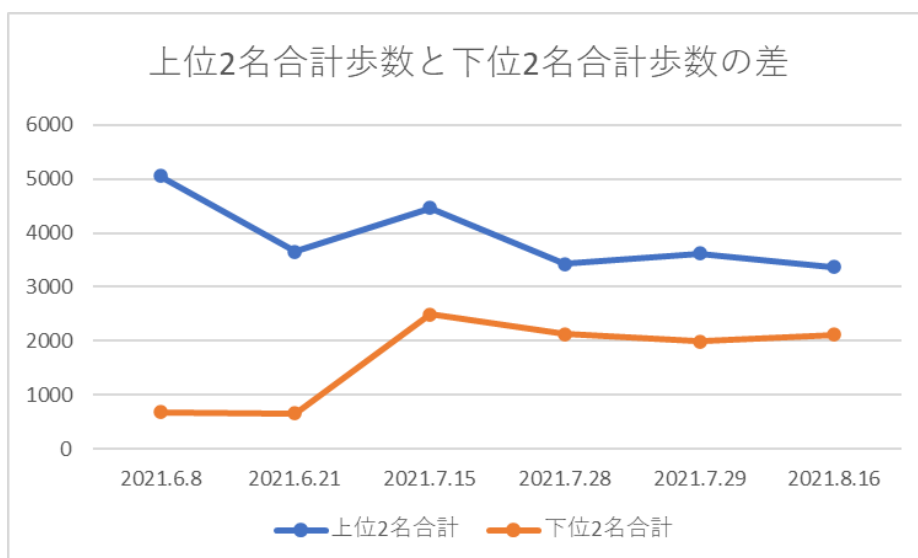


図5 上位2名合計歩数と下位2名合計歩数の差

さらに、動画カンファレンスによる保育改善前（6月21日）の歩数と、保育改善後（7月15日）の歩数の歩数平均の比較について対応のあるt検定を実施した（2日間のうち、どちらかを欠席した園児Fと園児Gは分析から外した）。t検定の結果、保育改善後（7月15日）の方が有意に高い結果が示された（ $t(8)=-4.35, p<.01$ ）。t検定の結果から、「園庭環境の工夫」「保育技術の向上」「計画性を持った個別対応」を実践したことで身体活動量を増やす一定の成果があったと考える（表6）。

表6 保育改善前（6月21日）と、保育改善後（7月15日）の歩数平均の比較（t検定結果）

| | 平均値(M) | 標準偏差(SD) | t値 |
|-----------|---------|----------|----------|
| 2021/6/21 | 1131.78 | 526.03 | -4.35 ** |
| 2021/7/15 | 1762.44 | 396.78 | |

** $p<.01$

表 7 園児の歩数計測結果

| | 2021.6.8 | 2021.6.21 | 2021.7.15 | 2021.7.28 | 2021.7.29 | 2021.8.16 |
|---------------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| A(1歳6か月) | 3044 | 1868 | 1942 | 欠席 | 1215 | 1308 |
| B(1歳4か月) | 2011 | 1212 | 1743 | 1533 | 1461 | 1300 |
| C(1歳9か月) | 1284 | 346 | 1893 | 1072 | 1650 | 欠席 |
| D(1歳9か月) | 936 | 1269 | 1570 | 1092 | 962 | 欠席 |
| E(1歳6か月) | 143 | 310 | 923 | 1295 | 1031 | 1255 |
| F(1歳10か月) | 1232 | 欠席 | 1821 | NG | 1025 | 欠席 |
| G(1歳11か月) | 534 | 1155 | 欠席 | 欠席 | 欠席 | 973 |
| H(1歳5か月) | 1071 | 1005 | 1581 | 1051 | 1973 | 欠席 |
| I(1歳5か月) | 欠席 | 897 | 1888 | 欠席 | 欠席 | 1140 |
| J(2歳0か月) | (計測できず) | 1492 | 1801 | 1377 | 1289 | 1445 |
| K(1歳11か月) | (計測できず) | 1787 | 2521 | 1897 | 欠席 | 1924 |
| 平均(小数点以下切り捨て) | 1281 | 1134 | 1768 | 1331 | 1325 | 1335 |

以上のように(1)動画カンファレンス(2)歩数計測の結果を比較し、考察した。

また、補足であるが1歳児との具体的な遊び方について記述をする保育士アンケートにも変化が見られた。5月には1歳児と楽しんだ遊びの項目数が「4」であったが、7月には項目数が「14」、8月には「19」と増えた(表8)。

アンケートの記述内容を見ると、5月のアンケートでは“遊具・物・場所の名称”のみだったが、7月以降は「・・・走る」「・・・くぐる」「・・・ジャンプする」など、子どもたちの動く姿を意識した記述が多くなった。動画カンファレンスにより、1歳児の発達段階を踏まえた遊び方を具体的に知り、ヒントを得られたことで保育士とのやり取りや触れ合いを“1歳児の遊び”と捉えることができるようになっただけでなく、記述からもうかがえる。保育士一人一人が、より多くの遊びを実践できるようになったことで、自信をもって遊びを発展、工夫し、フラフープ一つで、「フラフープ電車ごっこ」「フラフープを追いかける」「フラフープをジャンプする」など、一つの「物」で、複数の遊び方を提示できるようになったといえる。遊具が増設されるなどの大きな変化がなくても、1歳児の遊びの項目を増やすことができた。

保育士が子どもに提示できる遊びの項目が増えたことは、「身体を動かすことを体験するために必要な環境を用意し、いろいろな遊びを一緒に楽しむ」ことができるようになった結果と考えられる。

表8 1歳児とどのような遊びを実践したか

| アンケート実施日 | 2021.5.20 | 2021.7.15 | 2021.8.16 |
|----------|--------------------|---|---|
| 項目数 | 4 | 14 | 19 |
| 具体的な遊び方 | 砂遊び・ブランコ・ボール・シャボン玉 | 風船サッカー・フェンスの風船を触る・保育者の風船を追いかける・フラフープの電車ごっこ・フラフープを追いかける・フラフープをジャンプする・イラストボードまで走ってタッチ・ひも付き風船を引っ張る・足こぎ乗用玩具でイラストボードまで走る・足こぎ乗用玩具でコースを走る・砂場遊び・ブランコ・保育者と手をつないで歩く・乗用玩具で遊ぶ | フラフープトンネル・フラフープ電車ごっこ・フラフープを追いかける・フラフープをジャンプする・風船サッカー・風船キャッチ・風船宝探し・イラストボードまで走る・イラストボードを探す・イラストボードを裏返す・足こぎ乗用玩具で競走する・足こぎ乗用玩具で追いかけっこ・足こぎ乗用玩具で保育者の後をついていく・朝顔の花を使ったままごと・ホースの水を触る・水のトンネルをくぐる・ホースの水から逃げる・ブランコ・三輪車 |

【まとめ】

今回の検討では、1歳児の園庭遊びにおける問題点を把握し、身体活動を促す保育実践の検討を行った。改善策として挙げられた「園庭環境の工夫」「保育技術の向上」「計画性を持った個別対応」を実践し、実践前と実践後の（1）動画カンファレンス（2）歩数計測の結果を比較し考察した。

改善策として挙げられた保育実践を行ったことで、子どもの様子や保育士の関わり方、子どもの歩数計測結果、及び保育改善前後の歩数平均の比較に変化が出たことから、一定の成果が得られたと考える。

【今後の課題】

今回の検討は6月から8月の3か月間であったため、気候や気温による身体活動の制限は否定できない。また、今後子どもたちの月齢が上がっていくことで成長とともに興味関心に変化し、必要な玩具や遊びの項目にも変化が見られ

るであろう。また、当初の保育士アンケートでは、なぜ 1 歳児クラスの保育士の遊びの項目数が少なかったのかを明らかにすることはできなかった。

以上の課題を解決するために、今後は季節を通した歩数計測を継続し、発達に伴う遊びの項目内容の変化にも着目していき、1 年間を見通した 1 歳児の身体活動を促す園庭遊びについて考察を深めていきたい。また、1 歳児の園庭遊びを展開する保育士の困難感を明らかにするために、保育士アンケートについては複数園で実施し、園庭における 1 歳児の十分な身体活動の在り方についてさらに検討を進めていきたい。

引用文献

- 1)長谷川恵美・定行まり子(2020) 保育所における 1 歳児の身体活動量と建築環境の関係に関する研究 日本女子大学大学院紀要(26), 67-75.
- 2)厚生労働省(2018) 保育所保育指針 フレーベル館
- 3)厚生労働省(2018) 保育所保育指針解説 フレーベル館
- 4)「幼児期運動指針ガイドブック」
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319772.htm 文部科学省
(閲覧日 2021/7/5)
- 5)齊藤多江子・増田まゆみ(2017) 1歳児クラスにおける「人」「物」「空間」と「遊び」との結びつき～遊びのきっかけに着目して～ 子ども宝仙大学紀要(8), 47-55
- 6)「5歳未満の子供のための身体活動、座りがちな行動および睡眠に関する新しい WHO ガイドライン」<https://www.who.int/news/item/24-04-2019-to-grow-up-healthy-children-need-to-sit-less-and-play-more> (閲覧日 2021/6/1)
- 7)吉岡由美・戸井田英子・佐藤晶子・小木曾加奈・中澤弥子(2012) 保育園での活動内容と歩数調査による園児の運動量の関係 長野県短期大学紀要(67), 33-41

参考文献

- ・石沢順子・佐々木玲子・松寄洋子・吉武裕(2017) 幼児の日常身体活動量：幼稚園児と保育園児の比較 白百合女子大学初等教育学科紀要(1) 1-8
- ・加藤敏子(2019) 乳児保育～一人一人を大切に～ 萌文書林
- ・松寄洋子・石沢順子・土橋久美子(2021) 乳幼児期の身体活動に関わる環境についての研究(1)－保育環境における評価スケールの比較－ 千葉大学教育学部研究紀要(69), 145-151
- ・宮里暁美(2018) 0-5歳児 子どもの「やりたい！」が発揮される保育環境 株式会社学研プラス
- ・及川留美・金瑛珠・小野崎佳代(2020) 保育実践の質向上を目指した園内研修について考える－砂場を対象としたビデオカンファレンスの事例から－ 東京未来大学研究紀要 14(0), 175-182
- ・佐野裕子・高尾公矢(2015). 3歳未満児の健康生活に関わる家庭的保育者の支援－生活習慣形成を手がかりとして－ 聖徳大学紀要(48), 47-53
- ・島崎あかね(2011) 乳幼児期における運動遊びの重要性～発達段階にあわせた運動遊び～ 上田女子短期大学紀要(34), 111-118
- ・田村忠夫(2004) Let's じゃれきんぐ! 株式会社チャイルド本社

・吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮(2015) 保育者によって観察された基礎的運動パターンと幼児の運動能力との関係 発育発達研究(68), 1-9